

いた。

稲津は審議にあたっては「剛直（気性が強く、信念を曲げないこと）で正しく、皆が卓識（すぐれた判断力や考え。すぐれた見識）として従っていた（墓碑）」という。九月には権判官に就任し、正六位に叙せられた。

6 雲井龍雄と稲津濟

明治二年、集議院議員として活躍していた稲津濟は、旧友の雲井龍雄と再び親交を深めている。雲井は鹿児島藩に敵対的発言をして貢士を辞職してからは、政府に不満を抱く浪士を集め、その扶養に苦心していた。当然、政府から不穏な行動と危険視されていたのであるが、濟はその雲井を九月二十三日に寄宿生として集議院に雇っている。この時、濟は有能な人材を失いたくないとの思いがあったのであろう。「君を飄然（ここでは「野放し」という意味か）とさせておいたら、事端（事件の発端）にかこつけて、いかなる騒ぎを起すかも知れないので、君をしつかりと繋いでおくのだ」と雲井に語ったという。しかし、雲井は寄宿生という閑職に甘んじることができず、翌月一九日に「ここに居ては、自由な意思を述べることさえできない」と集議院を去っていった。それまで濟は、資金面で雲井への援助を惜しまなかったが、雲井の要求が大きくなるにしたがって手に余ったようで、某月八日付で融資を断っている。それでも、濟は雲井にとって理解者の一人であったのであろう。十二月十九日付で雲井が養母に送った書簡に「安井（息軒）・岡松・田口の三先生はじめ、深々御世話も下され、其外、稲津（濟）判官（翌三年四月には弾正権大忠に叙せられる）、林半七（後の枢密顧問官）殿など旧来の心易き人々大に憐み呉（以下略）」と記している。しかし、雲井のもとに集まっていた浪士たちが政府転覆を図ったとして、明治三年四月に捕縛され、雲井龍雄は二十七歳の若さで断罪に処せられた。

7 貢士後の稲津濟

雲井の事件が影響したのであろうか、稲津は同年十一月に官を辞し、中央政界から身を引いている。濟の墓誌によると「弾正権大忠に任命された前後に自己の意見を述べたが、当局はこれを採用することなく、ついに在官六ヶ月にして免官する」とあり、自分の望む政策が政府に受け入れられない不満があったのであろうか、辞職の要因はよく分からない。

依田百川によれば、「嗚呼、南洋（稲津濟の号）の鋭敏の才能を発揮させ、明治政府の中枢に職を得ていれば、必ず大きな仕事を成し遂げていただろう。思えば、道半ばでつまずき、志を遂げることが出来なかった。惜しい。旧友が銘した墓誌は褒め過ぎではない」と墓碑に記している。

飢肥藩に帰ってからの稲津濟は大参事となり、廃藩後は都城県の飢肥出張所の官員を勤めた。この間、同地において廃仏毀釈を推進したという。また、平部嶮南が飢肥を不在にしている間（明治四年九月から翌年六月まで上京）、稲津濟が跋扈（ほしいままにふるまい）して紀綱（国家を治める大法と細則・規律）が大いに緩み飢肥区内の村々に芝居を許し、油津・外浦に妓館を設け、自分らも昼夜遊宴に耽っている」と嶮南が『六鄰莊日誌』に濟を批判した記事を遺している。

8 晩年の稲津濟

宮崎県設置後、稲津濟は明治六年六月頃までに上京し、旧友の依田百川らと再会している。また時期は不明だが華族会館（明治七年六月発足）の書記に就任している。この間、旧主の伊東祐相は濟を遠ざけていたが、祐相が死去すると濟が伊東家の東京屋敷の家政に口をはさむようになり、九年四月頃には伊東家の家令と濟の間で内紛が起こった。急遽飢肥から高山伝蔵と小村良輔が上京して紛争の解決に取り組み、濟は伊東家の家政から離れることになった。『六

鄰莊日誌」ただ、若い当主の伊東祐婦とは折り合いが良かったように、祐婦宛て数点の手紙が残っており、その後発生した飢肥商社事件について、済がどの様に関係していたかなど、研究課題である。

この頃、済は井上頼圀（国学者・『古事類苑』を編纂した）の門下となり樽井藤吉（アジア主義者）を助手として古代から明治までの外交文書を取調べたともいうが確認が取れていない。ただ、『日向文献史料』によると明治九年十二月に『皇朝馭遠私史序』を撰したとあり、樽井も『大東合邦論（明治二十六年初版）』の中で「平素師事する稲津南洋先生」と記している、そのような活動を行っていたと思われる。

済は明治七年に華族会館に勤めながら晩年まで詩作にも励んでおり、杉浦梅潭（最後の函館奉行、開拓使判官を明治十年に官を辞してから閑居している）が上野の公園で結成した詩社の晩翠社で、依田百川・中沢見作・鎌田景弼らと活動している。詩作活動については友人の依田の日記によってある程度の様子がうかがえるが、済ほどの人物であるから他の分野でも活躍したのではないかと思うが、唯一、明治二十二年四月十九日に依田百川・高松保郎と図つて北甲賀町三番地に愛生舎を創設して広く薬を販売したことぐらいしか分からない。この事業も一時は利益を上げたようであるが、依田の日記（明治二十七年十一月四日の項）によると、済と高松の間に不和が生じたようである。

済が亡くなったのは明治三十一年三月九日のことであった。依田は日記に「稲津南洋（済）病死せりといふ。南洋久しく中風にて病みしが、終に死せり」と短く記している。依田が済の妻に頼まれて済の墓誌を書き上げたのは五月三十一日のことであった。

9 稲津済の妻について

稲津済の妻についても依田が記している。それらを意識すると「済の妻はもと芝神明町の芸妓（声妓）で名を政といい容色よく、

済に愛されて妻となった。済が飢肥に帰国したとき（明治三十一年月）従い、再び東京に出京した。そのような女性には稀な人で、心ざまさかしく（かしこく）、儉約して驕る（思いあがる）ことがなかった。済が官を辞（都城県が廃止された時のことか）して、出費も多かつたが、よく貯蓄して家を新築した（明治十九年、西の窪神谷町の旧仙石氏邸に家を建てる）。さらに済が中風に倒れると収入もなくなったが、亡くなるまで約十年に渡ってよく看病をした。済が倒れたのは二十年から二十五年の間と思われ、樽井藤吉が稲津に『大東合邦論』の漢文への斧正を依頼しているが病により気力衰耗して依田百川を紹介されている（ただし、二十六年六月付けで同書の跋文を漢文で寄稿している）。済は、明治二十五年頃に一時回復して伊豆の大磯に療養したようだが、同年十一月頃にはが中風が再発した。

済の死後、明治三十三年六月一日、政子は依田百川に墓碑文の礼を述べ遺骨を遠く飢肥に持ち帰ると伝えている。

済の墓は飢肥板敷の安国寺跡墓地にたたずんでいる。済夫妻には実子はいなかったが、『嶠南日誌』には養子の稲津延次郎が明治十二年一月四日の項に登場する。延次郎は飢肥藩士・米良一穂（西南戦争勃発当時、第九大区戸長）の弟である。

八 史料編

1 小倉処平史料

① 妻が語った小倉処平の逸話（「小倉タメ覚書」山之城文書）

この小倉処平に関する逸話は、処平の次男・小倉誠之介が郷土史家・山之城民平の依頼に答えて、九十歳を前にした母タメから聞き取りを行なったものである。タメは夫処平と同じ弘化三年（一八四六）年の生まれと思われるので、数え歳八十九歳ならば昭和九年（一九三四）、満年齢ならば昭和十年のことと思われる。誠之介も

「五十年前の記憶であるので、老人の記憶が全部確かとは保証いたしかねますが、大体のことはこのようなことでした」と注記して、他の史料と精査する必要があるが、今までよく知られていなかった小倉処平の人柄がよく表現されている。山之城からの質問は項目立てされていたのだから、誠之介がまとめた聞き取り文は、その項目立てに沿って記述されている。逸話の中には、処平が金作をする行があるが、これは処平が日々の生活に困窮したためではない。国のために奔走する処平には人を引きつける魅力があり、飢肥商人・与兵衛のように支援を惜しまない義商があったという。なお、この与兵衛は城下商人の中でも大層であった小玉与兵衛のことであった。「嶠南日誌」によると小玉与兵衛の妻の兄が長州藩の奇兵隊に属しており、埋もれた飢肥藩の幕末史の一端を知る手がかりになりそうである。また、私は、西南戦争に加わるべく帰郷した処平が、出兵するまでに一月以上もかかっていることに疑問を懐いていたのだが、この証言から当時、処平が体調を崩して、出兵が遅れたことを初め知ったのである。その万全でない体調を押し、劣勢の西郷軍を挽回すべく奮戦した処平の心情を推し量れる逸話である。

解説文の番号は質問項目に付された番号であると思われる。以下、記述通りに掲載するが【】内は筆者が補足した箇所である。

② 小倉処平先生の平生

別段変った事も有ませんが、一時もおち付いて居る間も無き程、極めて忙敷、外出先より帰りましても玄関前であれこれと用を云付け表座敷で羽織をぬぎ、中ノ間で袴を取り、次ノ間で衣物(を)ぬぐと云った風で、其間に彼此と話す位でありました。或る時「金が無く成った、だれからか金を貰つてこねばならん」と申しますから、「只金をくれる人が有ものか」と申しますと、「おれには呉れる人がある」と云ふて笑ふて居りました。帰つてきて五十円許り出

しましたから、たづねますと「本町の与兵衛さんへ行つて、与兵衛さん今日は金を貰いに来た」と云ふたら、はいと返事して酒肴の御馳走をした帰りに、なんぼいるかと云ふから、五十円許貰ひたいと云ふたら、たった五十円許りでよいかと云ふて出して呉れたよ」と云ふて笑つて居りました。又長崎勤務中【明治元年か?】、今町・川添(かわぞえ)弥(や)市(いち)ぎ(ぎ)同(どう)地(ち)へ参(ま)り主人(しゅじん)の下宿(げしゆく)を訪(ま)ね成(な)された処(ところ)、主人(しゅじん)は留守(くわしゅ)で机(か)の上に百五十円位金(かね)がばらまいて在(あ)ったから弥(や)市(いち)さんが行李(りょうぎ)へ仕末(しま)して呉(ま)れたそふで、後(ご)で会(あ)ふた時(とき)弥(や)市(いち)さんが「何ん(なん)は何ん(なん)でもあまりだと叱(な)る様(よう)に話(わ)したら、大笑(たふし)ひして居(ゐ)つた」と弥(や)市(いち)さんが話(わ)されました事が有(あ)ります。又、江藤(えとう)【佐賀(さが)の乱(らん)の首謀(しゅぼう)者(しや)・江藤(えとう)新平(しんぺい)】を逃(に)した廉(れん)で豫章館(よしょうかん)に拘留(きうりゅう)された時(とき)【明治(めいし)七年(しちねん)三月(さんげつ)十五日(じふごにち)】、柳田(やなぎた)さんが其(その)晚(ばん)見舞(みまひ)つたら「グウグウと高(たか)軒(けん)で眠(ね)つて居(ゐ)つた。どこ迄(どこまで)大胆(だたん)な男(おとこ)かならん」と話(わ)された事が有(あ)りました。又(また)或(また)時(とき)、佐賀(さが)より帰(かへ)りに延岡(のべおか)の井筒屋(いづつや)(商店(しょうてん))に寄(よ)り、佐賀(さが)の殿様(てんやう)より貰(もら)つた黄金(おうごん)の大判(だいばん)を見せたら、大(お)へんほしがったから呉(ま)れたら喜(よろこ)んだよ」と云(い)つて笑(わ)ひましたから、「それは誰(たれ)でも喜(よろこ)びますわ」と云(い)ふて笑(わ)ふた事が有(あ)りました。酒(さけ)は平素(へいそ)は飲(の)みませんが、つれが在(あ)つて飲(の)む時はなんぼでも飲(の)みましたが一向(いっこう)酔(よ)ふた事が在(あ)りません。只(ただ)「おれは飲(の)むと笑(わ)ふのが病(びやう)気(け)だ」と云(い)つて居(ゐ)りました。

③ 江藤新平氏、先生を訪ねし時の事

(1) 江藤(えとう)氏(し)との往來(わんらい)の間柄(まがら)は知(し)りませんが、香月(かつき)圭五郎(けいごろう)氏(し)とは十年(じゅうねん)來(き)の親友(せんとゆう)で洋行(やうぎやう)も同(どう)時(とき)だつたと申(まを)して居(ゐ)ました。香月(かつき)さん(さん)の宅(たく)を訪(ま)ねたり致(いた)しました。

(2) (3) 江藤(えとう)さん(さん)の宿泊所(しゆくぱくじよ)は本町(ほんまち)小玉(こたま)伝右(でんご)工門(こうもん)の二(に)、三軒上(さんけんじやう)の源四郎(げんしやう)(旅館(りやういん))方(かた)であ(あ)【り】ました。

(4) 一行(いっぎやう)の人員(じんぎん)は知(し)りませんが、宅(たく)に御出(ごしゅ)に成(な)つたは香月(かつき)圭五郎(けいごろう)【香月(かつき)経五郎(けいごろう)の誤(ご)り、江藤(えとう)新平(しんぺい)の側近(せききん)】氏(し)と中島(なかじま)(名(な)は不明(ふめい)【中島(なかじま)一郎(いちやう)と思(おも)われる】)さん(さん)二人(ふたり)で有(あ)りました。其翌日(そのあした)と思(おも)いますが二人